

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

2020年夏季オリンピック・パラリンピックの開催が東京に決まった。東京で56年ぶり、アジアでは2回目のオリンピック開催は初であり大いに賑わっている。前回招致ではリオデジャネイロに惜しくも譲ったが、その反省点を有効に活かした。また、招致メンバーの周到に準備された熱いプレゼンテーションには釘付けになった。各界が一致団結して取り組んだ成果で、まさにチームプレイで勝ちとった賜物である。五輪招致関係者のゆるぎない情熱と努力には大いに賞賛したい。

しかし、手放しで喜んでばかりもいられない、五輪までに解決しなければならない問題も山積みである。福島第一原子力発電所の汚染水問題の収束は絶対課題であり、安倍首相はコントロール下にあるとプレゼンテーションしたが困難な道のりであることは明白である。東京オリンピックの課題は、今後の日本の課題であるとも言い換えることができる。

前回の五輪は戦後からの復興といわれたが、今回は東日本大震災からの復興がキーワードであろう。東京に多くの人的物的資源が流れ、被災地の復興の遅滞などはあってはならないことである。今後の電気需要の増加や環境資源対策をどう行っていくのか。若い世代に夢を与えられるような大会を心より期待したい。

1964年東京オリンピックの4年後に日本消化器外科学会は発足、翌69年には日本消化器外科学会雑誌第1巻第1号が発刊になっている。今号では症例報告9編と臨床経験1編が収載されている。そのうち4編が併存疾患や凝固障害下での治療、術後管理についての報告であった。併存疾患や凝固障害を伴うときの手術、術後管理にはしばしば難渋することが多い。十分な準備と対策を行うことにより施術が可能となった例、凝固障害を引き起こす疾患の発症によって治療に難渋した例が報告された。消化器外科医だけでなく内科、多くのメディカルスタッフの知識の集結によって診断、治療できたのであろうと推察している。

高齢化により併存疾患が増加し、外科医が知っていなければならない病態も以前に比べて多くなった。その疾患の知識の有無や対応により手術適応や術後経過が変わることもありうる。今後も貪欲に知識を吸収して日本消化器外科学会雑誌でまず一步を踏み出し、知見を拡げどんどん世界に向けても発信してほしい。

(竹之下 誠一)

2013年10月1日